

## 条件反射制御法を支える社会内施設と入院病棟との連携

### 1) 各ステージでの問題行動再現の可能性

条件反射制御法は次の4ステージで構成されており、①から④に向けて順序良く進めることが基本である。

#### ① 制御刺激ステージ、②疑似ステージ、③想像ステージ、④維持ステージ

上記の流れの冒頭にある①制御刺激ステージは、主には安定状態を招く反射を設定するものであり、病棟内では穏やかに、社会内でも安全に行える。対象者に社会内で対応するこの技法の初心者でも、気軽に開始できるのがこのステージの制御刺激とよかったことの書き出しである。

その後の、②疑似ステージと③想像ステージでは問題行動を司る反射を刺激し、作動させるものであり、欲求が生じる。制御刺激ステージで安定して治療作業を行っていた患者が、疑似ステージを開始したその夜から退院を希望し始めたというケースはいくつもある。また、疑似により激しく生じていた反応が治まった後に開始する想像で、再び激しく反応することは通常の経過である。さらに、疑似ステージで書き出す体験は辛かったことであり、その作業中に恐慌状態に陥った患者もいる。従って、疑似と想像、辛かったことの書き出しは、社会内で行う際は慎重な準備と見極めが必要であり、十分な経験をもった者が行うことがよい。

維持ステージは疑似と想像、辛かったことの書き出しを終え、読み返しも反復し始めた後に開始するステージであり、問題行動が生じる可能性は低い。

### 2) 社会内施設と入院施設の連携

逸脱して反復する行動の作動性が低ければ、制御刺激とよかったことの書き出しだけで、問題行動が生じなくなった例もいくつかある。これらの治療作業は社会内の施設でも積極的に行うことがよい。

社会内の施設でそれらの治療作業を行っても、問題行動が治まらない場合は、入院治療を検討することがよい。下総精神医療センターの専門病棟で条件反射制御法を開始から終了まで行う期間は3か月であるが、第一ステージを終えている者ならば、より短期間で入院治療を終えられる。

問題行動に対する治療を下総精神医療センターへの入院治療で開始する患者が、規則的に就労する自立した生活を送る能力をもたない場合は、回復支援施設に入寮することが多い。その際には、条件反射制御法の維持作業を支える施設に送り、維持作業が継続されるようにする。